

集団遊びにおける年長幼児のルールを破る行為とその内容

—規範意識の育ちにつながる子どもの葛藤に着目して—

長田 紗季¹・西館 有沙²

Actions and contents of breaking the rules of young children in group play

—Focusing on children's conflicts that lead to the development of norm awareness—

Saki NAGATA and Arisa NISHIDATE

E-mail: nishiari@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード: 幼児教育, 人間関係, 規範意識, 遊びのルール, 葛藤

Keywords: Early childhood education, Human relations, Norm awareness, Rules of play, Conflict

I はじめに

幼稚園教育要領(2017)や保育所保育指針(2017)には、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つとして“道徳性・規範意識の芽生え”が挙げられており、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる」と記されている。幼児の周りには、交通ルールのような規則もあれば、他人の物を勝手に取らないといった道徳的なもの、食後に歯を磨くといった習慣化されるべきもの、遊びを楽しく進めるために守る必要のあるものなどがある。上杉(2011)は、規範意識とは「外的規範を個人が自分の中に取り入れる枠組み」と、外的規範を取り入れることにより形成される「内なる規範」としてしている。

保育所等において子ども同士の間で生じるトラブルについてみると、3歳クラス児では物の取り合いが多くを占めるものの、年齢が上がるにつれて物の

取り合いに関するトラブルは減り、代わりに遊びや生活のきまりをめぐるトラブルが大きな割合を占めるようになるという(高木, 2000; 小原・入江・白石・友定, 2008)。共有物を独り占めしたり相手の物を取ったりしてはいけないことや、たたくななどの身体的な攻撃をしてはいけないことは、大人から繰り返し伝えられ、自身もそれによるトラブルをしばしば経験することで、子どもの中にきまりとして定着していくと考えられる。また幼児期には、これらの行動をとる代わりに相手と交渉したり自分の気持ちを調整したりする力が徐々に身についていく。結果として、物の取り合いは4, 5歳クラスでは減少すると考えられる。一方で、遊びや生活のきまりの中には状況や条件によって変化するものもあり、きまりを守ることより自分の思いが優先されたり、きまりを守ることに葛藤や不満が生じたり、意見の衝突が起こったりすることがある。そのため、4, 5歳クラスにおいても、きまりをめぐるさまざまなトラブルが生じると考えられる。幼児の規範意識の形成に関する研究の動向を整理した湯浅(2016)は、年中児や年長児については身近な問題から調査内容を設定して規範意識の形成過程をとらえることを提案しており、遊びにおけるルールへの意識についてもさらなる研究の蓄積が必要であるとしている。

村野(2015)は、ドッジボールや鬼ごっこなどの遊びでは、相手の怒りや抗議を受けて遊びが中断し

¹ 金沢市立双葉保育所

² 富山大学教育学系

たり、時には相手に泣かれる体験をするなど、自分や相手と向き合い葛藤する機会が特に多くなることから、5歳クラスにおいてルールのある遊びを取り入れることの重要性を指摘している。ドッジボールや鬼ごっこなどの遊びにおいては、きまりを「ルール」と表現することが多いことから、これ以降では「ルール」という表現を用いる。これらの遊びは、決められたルールに則って勝ち負けを競う集団遊びであり、誰かがルールを破れば、それが勝敗に影響したり、不公平感が生じたりすることになるし、ルールに従っていても勝敗がどちらかのチームに偏ってしまう不公平が生じるケースがあるため、ルールとどう向き合えばよいのかを遊びを通して学ぶ機会となると考えられる。この点について、幼稚園教育要領解説(2018)には「他者と共に遊ぶということは、自他に共有された何らかのルールに従うということであり、ルールを守らない幼児がいると楽しい遊びにならず、その遊びも継続しない。友達と一緒に遊ぶ中で、楽しく遊ぶためには参加者がルールに従うことが必要であることや、より楽しくするために自分たちでルールをつくったり、つくり変えたりすることもできることが分かっていくことは、生活上のきまりを理解し、守ろうとする力の基盤になっていく」と記されている(領域「人間関係」の内容の11番目)。

そこで本研究では、ドッジボールや鬼ごっこなどの複数人で集まって行う遊び(集団遊び)であって、かつ決められたルールに則って進める遊びに焦点をあて、子どもたちがどのような時にどのような形でルールを破るのか、ルールを守ることをめぐって子どもの中でどのような葛藤が生じるのか、葛藤の中で子どもはどのように主張あるいは抑制をするのかを明らかにすることを目的とする。

II 方法

1. 対象

対象児は、X県内の幼稚園1カ所の年長の2クラスに在籍する幼児35名であった。観察対象場面は、学年あるいはクラス単位で活動を行う「みんなと一緒の時間」もしくは、それぞれの子どもが好きな場所で好きな遊びを楽しむ「自由遊びの時間」において実施された、同学年の集団で行うルールのある遊びであった。「みんなと一緒の時間」は主に保育者の

提案によって遊びが始まり、「好きな遊びの時間」は子どもからの提案によって遊びが始まるという違いがあるものの、幼稚園はこの2つの時間で一日が構成されており、それぞれの時間で得られた経験が子どもの規範意識の形成につながっていくことから、両方の時間を対象にすることにした。ただし、ルールを破る行為の発現の仕方やその後の周囲の反応は、保育者が常にそばについている「みんなと一緒の時間」と保育者がそばにいないケースが生じうる「好きな遊びの時間」で異なることが考えられた。そのため、結果において事例を示す際にはどの時間に見られたものかを明記することにした。観察園においては、転がしドッジ(ボールを投げて相手に当てるのではなく転がして当てるドッジボール)やリレー、鬼ごっこがよく行われており、本研究ではこれらのうち、転がしドッジとリレーを対象とした。

転がしドッジとは、円または四角い枠の中と、枠の外に子どもが配置され、枠の外にいる子どもがボールを転がして枠内の子どもに当てるゲームである。ボールを当てられた子どもは枠外に出て、ボールを当てる役になるか、もしくは休憩スペースでゲームの終了を待つ。ボールは転がすこととなり、投げたり蹴ったりした場合はルール違反となる。枠内にいる子どもはゲーム終了まで枠内に残ることを目指す。リレーは、複数名で2つ以上のチームを作り、走る長さを決めてバトンを継ぎながら走り、最終走者がゴールした順位を競う。

2. 手続き

2018年12月から2019年1月にかけて、幼稚園において“しっぽとり”やリレーといった遊びを観察(予備観察)し、ルールに関する子どもの言動を整理して、本調査の観察項目を作成した。次に、2019年5月から10月(夏季休業期間を除く)にかけて、年長クラスの集団で行うルールのある遊びについて非参与観察法を用いた本調査を行った。調査者は手持ちのビデオカメラで撮影を行った。観察後はその日のうちに過程叙述体を用いて文字記録を作成し、撮影映像でルールを破る行為の有無や、子どもと保育者の発話や行動の内容について確認し、文字記録の加除修正を行った。

3. 観察項目

予備観察の結果より、観察項目は「ルール共有後

にルールを破った子どもの行動および周囲の反応」
「ルール共有前にルールを破った子どもの行動および周囲の反応」「ゲーム途中の離脱行為とそれが生じた理由」の3項目であった。

4. 倫理的配慮

研究の目的や方法、プライバシー保護の方法については、事前に書面と口頭で協力園に説明を行い、許可を得た。ビデオカメラでの録画記録は、他者の目に触れることのないように調査者が管理した。記録をデータ化する際には、個人が特定される情報(氏名や園名等)を排除した。

Ⅲ 結果と考察

1. 共有されたルールの内容

集団でのルール遊びを行うにあたっては、初回は「みんなと一緒の時間」で行われ、保育者が遊びの進め方や基本的なルールについて説明することが多い。転がしドッジ、リレーのそれぞれにおいて初回において共有されたルールの内容は以下の通りであった。

(1) 転がしドッジ

対象学年において、「みんなと一緒の時間」に初めて転がしドッジをするという日から観察を開始したため、観察によって共有されたルールを確認した。

- ・逃げる人は赤帽子、鬼は白帽子をかぶる
- ・鬼は枠線の外から枠内にいる人を狙い、ボールをバウンドさせずに転がす
- ・逃げる人は枠内で、ボールに当たらないように逃げる
- ・逃げる人はボールに当たったら枠外に出て、鬼になる
- ・枠内でボールが止まった時は、鬼がボールを取りに行く
- ・自分で当たったことに気づかなくても、審判に当たったと言われたら鬼になる

(2) リレー

観察時には、リレーのルールはすでに共有されていたため、保育者への聞き取りにより、共有されたルールを確認した。

- ・チームに分かれた後、どのチームかわかるように帽子の色を変え、走者順がわかるようにゼッケンをつける

- ・スタートの合図を聞いてから走り始める
- ・スタートラインや走行ラインを踏み越えてはいけない

2. ルールを破る行為とその件数

(1) 転がしドッジ

転がしドッジについては、5月に5回、6月に10回、9月に8回の計23回分のゲームを観察した。子どもが1回のゲームにおいてルールを破った行動の平均件数を求めたところ、共有されたルールを破る行為は5.3件、ゲーム途中の離脱が1.0件、共有前のルールを破る行為が0.6件であった。共有前のルールを破る行為とは、たとえば他児がとったボールを横取りしようとする、枠内で寝転がる、ボールが当たったかどうかの審議中にボールを転がして他児に当てるなどであった。

共有されているルールを破る行為やゲーム途中の離脱はどの時期においても見られた。子どもが破ったルールの内容についてみると、ボールを投げたり蹴ったりした(26件)、枠内に入ってボールを取ろうとした(21件)、ボールを避けるために枠線をはみ出した(18件)、ボールに当たったのに枠外に出なかった(13件)、枠内に入ってボールを転がした(10件)、ボールに当たって枠外に出たのに勝手に枠内に戻った(8件)、その他(12件)であった。その他には、途中でゲームから抜けていたのに最後まで残った子どもが並ぶ列に加わる、審判役を勝手に辞めてゲームに参加する、逃げる役の子どもがボールを転がす、ボールに当たっていないのに枠外に出てボールを当てる役になるなどがあつた。ボールを投げたり蹴ったりする行為や枠内に入ってボールを取ったり転がしたりする行為の背景には「ボールを当てたい」という思いが、ボールを避けるために枠線をはみ出す行為やボールに当たっても枠外に出なかったり枠内に勝手に戻る行為には「枠内で逃げ続けたい」という思いがあると推測される。ただし、枠線のはみ出しに関しては、ルールが十分に定着していないことが影響した可能性がある。

子どもが破ったルールのうち、ボールを避けるために枠線をはみ出す行為は、5月には毎回(5回)のゲームにおいて1~3件確認されたが、6月には10回のゲームのうち1回に1件のみとなり、9月には夏季休暇明けの3回分において1~3件あつたものの、その後(5回)は0件であった。ボールを避け

るために枠線をはみ出す行為については、複数人が同時にはみ出したり枠線から大きくはみ出したりする様子が見られた5月と比べると、9月には一度に枠線をはみ出す人数は少なくなり、はみ出す程度も小さくなっていた。また、ボールに当たったのに枠外に出ないという行為は、5月には5回中4回のゲームで1~4件あったが、6月は10回中3回において1件ずつ、9月は8回中3回において1件ずつであった。一方、ボールを投げたり蹴ったりする行為や、枠内に入ってボールを転がす行為は、5月にはあまり見られなかった(5回中1回に1件)が、6月以降のゲームで件数が増えた(6月は10回中4回において1件ずつ:9月は8回中3回において1~3件)。つまり、枠内に残るためにルールを破る行為は減る傾向にあったが、枠内の子どもにボールを当てるためにルールを破る行為は増える傾向にあった。

(2) リレー

リレーは6月に9回、7月に6回、9月に9回の計24回分のゲームを観察した。1回のゲームにおけるルール逸脱行動の平均件数を求めたところ、共有後にルールを破る行為は0.9件、共有前にルールを破る行為が0.2件、ゲーム途中の離脱が0.4件であり、いずれも件数が少なかった。リレーにおいて子どもが破ったルールの内容は、コースの内側を走った(10件)、スタート時にフライングをした(7件)、スタートラインより前に足が出た(3件)、バトンの受け渡しの際に相手チームの道をふさいだ(3件)、途中で走るのを止めた(2件)、その他(5件)であった。なお、途中で走るのを止めたケースは、他児と接触して転んでしまった、自分がどこまで走ればよいかわからなくなったといったハプニング時に観察された。また、相手チームの道をふさいだケースも、バトンを次走者に渡し終えた子どもがコース内にとどまっていたり、前の走者がまだいるのに次の走者がコース内に進入したりしたことにより起こっていた。リレーにおいては、ルールを破る行為は全体的に少なく、コースの内側を走る、フライングをする、スタートラインをはみ出すなど、いずれも「リレーに勝ちたい」という気持ちからルールの逸脱が起こったと言える。

子どもが破ったルールのうち、コースの内側を走る行為やスタート時のフライングは6月にはしばしば見られた(内側走行は9回中6回:フライングは

9回中4回)ものの、7月は内側走行が6回中1回、フライングが2回、9月は内側走行が9回中1回、フライングは0回と減少した。

3. ルールに関する子どもの発言とその内容

ルールに関する子どもの発言を、ルールに関する提案、チームの決め方の提案、チーム変えの提案、注意、判定、確認にカテゴリー分類して計数した。転がしドッジにおいては、ボールに当たったかどうかといった判定に関する発言が22件、「ボールに当たったのだから枠の外に出なければダメだよ」などの注意が12件、ゲーム進行上のルールに関する提案が2件であった。一方、リレーに関しては、「足が線から出ている」といった注意が6件、「白チームが勝った」といった判定が4件、チームのメンバー変更の提案が4件、ゲーム進行上のルールに関する何らかの提案が3件、チームの決め方に関する提案が1件であった。ルールの内容を確認するような発言は転がしドッジにおいてもリレーにおいても見られなかった。

4. 子どものルールを破る行為に対する保育者の反応

子どもがルールを破る行為をとった時の保育者の反応を内容別に集計した。転がしドッジにおいては、注意が34件と最も多く、判定が12件、ルールの確認が7件、ルールの提案が3件であった。リレーにおいては、注意と判定がそれぞれ6件、ルールの確認が5件、ルールの提案が1件であった。

5. 事例にみるルールを破った子どもの行動と周囲の反応

(1) 転がしドッジ

表1は、枠内に残るためにルールを破った子どもの事例である。表1の①に示した、枠からはみ出して逃げる事例をみると、5月には数人が同時にはみ出したり、枠線を大幅にはみ出したりする様子が観察された。いずれのケースでも子どもはすぐに枠内に戻っていたものの、この段階では枠内を逃げ続けるというルールが定着していなかったか、枠内からはみ出さずに逃げることにゲームの面白さを見出すまでに至っていなかった可能性がある。6月以降は枠からはみ出すケースは減少した。また、9月は夏季休暇明けを除いて枠線からはみ出しは生じてい

表 1. 枠内に残るためにルールを破った子どもの事例

<p>①ボールを避けるために枠線からはみ出す</p> <p>【5月：みんなと一緒に遊ぶ時間】 ボールに当たらないように逃げる役として枠内にいた子どものうち数人が、途中で枠外に出て柱に寄りかかったり、床に寝そべったりした後、再び枠内に戻って逃げていた。また、数人の子どもが勢いあまって同時に枠外にはみ出す姿や、枠線を大幅にはみ出す姿があった。ただし、いずれの子どももすぐに枠内に戻っていた。次戦でも同様に、複数の子どもが同時に枠外に大幅にはみ出して逃げていた。また、複数の子どもが柱に寄りかかって逃げたり枠内に戻ったりを繰り返していた。さらに、枠外に出てベンチに座って休憩し、すぐに枠内に戻る子どもが数人いた。</p> <p>【9月：みんなと一緒に遊ぶ時間】 3～4人の子どもが勢いあまって同時に枠線からはみ出すことがあった。ただし、子どもたちはすぐに枠内に戻った。なお、1名については、繰り返し枠外にはみ出す様子が見られた。</p>
<p>②ボールに当たったが枠外に出ない</p> <p>【5月：みんなと一緒に遊ぶ時間】 保育者に体調不良を訴え、ゲームを抜けてベンチに座って休んでいたA児は、次戦が始まって数分後にゲームに参加した。A児は参加後すぐにボールに当たったため、保育者から枠外に出るようにと声をかけられたが、枠内で逃げ続ける。その後、A児は再びボールに当たり、保育者から再び枠外に出るようにと声をかけられるが、枠外に出ることはなく、そのままゲームから外れてベンチに座ってしまった。さらに、A児はすぐに枠内に戻って逃げ続けたが、またもやボールに当たってしまう。この時にも、保育者から枠外に出るようにとの声かけがあったものの、A児は枠内で逃げ続けた。ゲーム終了後、保育者は最後までボールに当たらず枠内に残った子どもの列に並ぼうとしたA児に、ボールに当たったら枠外に出なくてはならないこと、A児はボールに当たっているのに列には並べないことを伝えた。</p> <p>【6月：好きな遊びの時間】 外周からB児が転がしたボールがC児に当たったが、C児は「Bくん、今のちょっと跳ねていたよ」と言い、枠外に出ようとしなかった。次戦においても、再び外周にいたB児が転がしたボールがC児に当たったが、「Bくん、ちょっと浮いていたよ」と言い、枠外に出ようとしなかった。ただしこの時には、C児は少し経ってから、自ら枠外に出た。</p> <p>【9月：みんなと一緒に遊ぶ時間】 外周にいたD児が転がしたボールにE児が当たった。E児は当たったことに気づいた様子であったが、審判である保育者に名前を呼ばれなかったため、枠外に出ようとせず、保育者の様子うかがいながら枠内を逃げ続けた。また、外周にいたF児が転がしたボールがG児に当たるが、G児は枠外に出ようとせず逃げ続けた。審判である保育者がG児に枠外に出よう促すと、G児はすぐに枠外に出た。</p>
<p>③ボールに当たって枠外に出たにもかかわらず枠内に戻る</p> <p>【5月：みんなと一緒に遊ぶ時間】 ボールに当たったH児は一旦枠外に出たが、すぐに枠内に戻った。しかし、他児に「さっき当たったよ」と指摘されると枠外に出て、外周からボールを転がす役を務めた。</p> <p>【6月：好きな遊びの時間】 外周からボールを転がす役を務めていたI児が、誰にもボールを当てていないのに枠内に入って逃げ始めた。次戦においても、外周からボールを転がす役であったJ児が、誰にもボールを当てていないのに枠内に入って逃げ始めた。保育者はJ児の行動に気づき、ボールを当ててから枠内に入るようにと声をかけた。</p>

ないことから、ルールを意識した行動がとれるようになってきていることがうかがえる。

表1の②のボールに当たったが枠外に出なかった事例については、5月には、保育者から枠外に出るように促されても、それに従えない子どもの姿が観察された。最初に基本的なルールの共有はなされていたこと、ボールに当たるたびに保育者から判定の声かけがあったことから、A児がルールを知らなかったとは考えにくい。A児の行動から、早々とボールに当たってしまい、枠外に出なくてはならないということに気持ちの折り合いをつけることができずにいたことが考えられる。6月には、ボールに当たっ

ても「ボールが跳ねていた」「ボールが少し浮いた」と主張し、枠外に出ようとしない子どもの姿が見られた。転がしドッジでは、敵がボールを投げたり蹴ったりした場合や、転がす勢いが強くてボールが大きく跳ね上がった場合にはボールが当たっても無効となるが、この時はボールの投げ方やボールの軌跡に問題はなかったことから、C児の主張は適切とはいえない難かった。しかしその後、C児自ら枠線の外に出て外周からボールを転がす役を務めていることから、C児の中で枠内に残りたいという思いを抑え、ルールに従おうとする意識が働いたことがうかがえる。また、9月の事例では、ボールに当たったことに気

づいたものの、審判である保育者に「当たった」という判定をされなかったために、保育者の様子をうかがいながら枠線の中で逃げ続ける子どもの姿（E児）が見られた。この子どもは、ルールは理解しているものの、枠内に残りたかったために自己申告できなかつたものと推察される。ただし、枠内に残った後も保育者の様子を気にしていることから、「枠の外に出なくてはならないのではないか」という思いと「枠の中に残りたい」という思いの間で揺れ動き、葛藤していたと推察される。同時期のもう一つの事例では、ボールに当たった時点では枠外に出ようとしなかつたものの、保育者の指摘を受けてすぐに枠の外に出る子ども（G児）の姿が観察された。この子どもも自ら進んで外に出るまでには至らなかつたものの、保育者の指摘には従うことができていた。なお、5月の事例に登場したA児も、この時期にはボールが当たると自ら枠の外に出るようになっていた。

表1の③は、ボールを当てられ、一度は枠外に出たにもかかわらず勝手に枠内に戻った子どもの事例である。5月にはボールに当たり、一旦は枠外に出たが、再び枠内に戻る子どもの姿が観察された。この子どもは、その後しばらくは枠内を逃げていたが、他児に「当たったよ」と声をかけられると、すぐに枠線の外に出た。6月には、外周にいてボールを当てることができていないにもかかわらず枠内に戻る子どもがいたが、保育者からボールを当ててから枠内に入るよう促されるとすぐに枠外に出た。9月にも、外周に配置された子どもが、誰にもボールを当てていないのに枠内に入る姿が観察された。このように、枠内に勝手に戻る行為は、枠線をはみ出す行為と同じように、指摘を受けるとすぐに修正された。「ボールを当てるまで枠内には戻れない」というルールが、子どもにとって疑問の余地をもたないきまりとして受け止められたため、判定に対して気持ちの折りあいをつけやすかつたのであろう。

表2は、ボールを当てるためにルールを破った事例である。表2の①は、ボールを転がさない（投げる・蹴る）子どもの事例である。5月には、何度かボールを投げてバウンドさせる子どもがおり、保育者からその都度、判定や注意の声かけを受けていた。6月以降には、数人の子どもがボールを蹴る姿が何度か見られた。ボールを蹴る子どもの姿は、みんなと一緒の時間においては見られず、好きな遊びの時

間であつて、かつ保育者が見ていない時に多く見られるという特徴があつた。子どもたちは保育者の目があるとルールを守ることに意識が向く一方、保育者の目がないとボールを当てたいという思いが勝ってしまうようである。保育者は、子どものそばに付いている時にはボールを転がすのが一番大切なルールであることを伝え、子どもたちとルールの確認をしていた。また、ボールを投げたと思われる子どもには、ボールを転がすよう促すといった注意の声かけを行い、ボールが意図せず浮いてしまったと思われる子どもには「ちょっと失敗しちゃったね」と声をかけ、もう一度転がすよう促すなど、子どもの思いに寄り添う対応をとっていた。加えて6月以降には、子どもから「跳ねていたからなし」「ちょっと浮いていたよ」など、判定の声が挙がることがあつた。

表2の②は、ボールを取るために枠内に入った子どもの事例である。5月には、外周にいた複数の子どもが同時に枠内に入り、まだ止まっていないボールを取り合う様子が観察された。保育者が、枠内に入らずにボールを取るようと声をかけると、子どもたちはそれに従っていたことから、子どもたちはボールを取ることに熱中して、つい枠内に入ってしまつていたと考えられる。また、自分が立っていた位置と反対側の枠外に出たボールを取りに行こうとして、枠内を通過した子どもがいた。この子どもは「私まだ1回も転がしてない」と言いながらボールを追いかけたり、ボールを取りたいという自らの思いがルールを守ろうとする意識を上回つてしまつたと考えられる。6月にも、2人の子どもが枠内に入ってボールを取ろうとする姿が見られた。5月の時点では保育者が注意の声かけをしていたが、この時には子どもから「中に入っちゃだめ」といった発言が出た。このことから、子どもたちの間でルールを守らなければならないという意識が高まってきたことがわかる。しかし、ルールを守らなくてはならないという意識が高まつたからといって、それが行動に直結するわけではない。9月にはそれ以前とは異なり、2つのチームに分かれて勝敗を争う転がしドッジが行われた。その中では、外周にいた複数の子どもが枠内に入ってボールを取り合う姿が何度か見られた。チームで勝敗を争う形になつたため、「勝ちたい」という強い思いがルールを破る行為の増加につながつたと推測される。

表2の③は、枠内に入ってボールを転がす子ども

表 2. ボールを当てるためにルールを破った子どもの事例

<p>①ボールを転がさずに投げたり蹴ったりする</p> <p>【5月 みんなと一緒に遊ぶ時間】一人の子どもがボールを投げてバウンドさせたのを見て、保育者は「跳ねていたから、今のはなし（無効）」という判定を行った。この子どもはその後再びボールを投げてバウンドさせたため、保育者は再びボールを転がすようにと声をかけていた。</p> <p>【6月 好きな遊びの時間】最初のゲームにおいて3人の子どもがボールを蹴っていた。次戦でも数人の子どもがボールを蹴っていた。その様子を見た保育者は、ボールを転がすことが最も大切なルールであることを伝え、子どもたちとルールの確認を行った。この日は多くの回で、子どもがボールを転がさずに投げる様子が観察された。この状況を受けて、保育者だけでなく、子どもたちからも注意や判定の声が挙がった。</p> <p>【9月 好きな遊びの時間】担任保育者がそばに付いていなかったこともあり、ボールを蹴る子どもがいた。その場に付き添っていた実習生が子どもに「ボールを蹴るのはいいのかな」と問いかけ、手でボールを転がすように促していた。</p>
<p>②枠内に入ってボールを取る</p> <p>【5月 みんなと一緒に遊ぶ時間】外周にいた複数の子どもが同時に枠内に入り、まだ止まっていないボールを取り合っていた。その様子を見た保育者が枠外でボールを取るようにと声をかけたことにより、その後は枠内に入ってボールを取ろうとする子どもはいなかった。また、1人の子どもは、自分が立っていた位置と反対側の枠の外に出たボールを取りに行こうとして、枠内を通過した。</p> <p>【6月 好きな遊びの時間】外周にいた2人の子どもが枠内に入ってボールを取ろうとした姿を見て、他児が「中に入っちゃだめ」と指摘していた。</p> <p>【9月 みんなと一緒に遊ぶ時間】この日はそれまでよりもゲーム性を高め、2つのチームに分かれて勝敗を争う転がしドッジが行われていた。最初のゲームでは、子どもたちはボールを取ろうといつも以上に夢中になっており、外周にいた数人の子どもが枠内に入ってボールを取り合う様子が2件観察された。また、枠内を通過して反対側にあるボールを取りに行こうとする子どもがいた。次戦でも、枠内に入ってボールを取り合ったり、枠内を通過して反対側にあるボールを取りに行ったりする様子が観察された。</p>
<p>③枠内に入ってボールを転がす</p> <p>【5月 みんなと一緒に遊ぶ時間】外周にいた子どもが枠内に入ってボールを転がす姿を見た保育者が、枠外からボールを転がすようにと声をかけていた。</p> <p>【6月 好きな遊びの時間】外周にいた複数の子どもが、何度か枠内に入ってボールを転がしていた。その様子を見るたびに、保育者は枠外からボールを転がすようにと声をかけていた。</p> <p>【9月 みんなと一緒に遊ぶ時間】外周にいた子どもが枠内に入って、転がっているボールを手のひらで打ち返すように転がした。その姿を見た保育者は、この子どもに枠内には入らないようにと声かけをしていた。</p>

の事例である。5月には、外周にいた子どもが枠内に入ってボールを転がす姿が観察された。その姿を見た保育者は、枠外からボールを転がすようにと声をかけていた。6月にも、枠内に入ってボールを転がす子どもたちの姿が見られ、保育者が注意の声かけを行っていた。9月には、枠内に入って転がっているボールを手のひらで打って転がす子どもの姿が観察された。

これらの事例から、子どもたちは「何とかして相手チームの子どもにボールを当てたい」という思いから、ボールの取り方や投げ方を試行錯誤していることがうかがえる。ゲームの面白さへの子どもの理解が進み、こうした試行錯誤が生まれるようになったことで、5月に比べて6月、9月のほうがルールや破る件数が増加傾向にあったと推測される。

(2) リレー

表3の①は、コーンや線の内側を走る子どもの事例である。子どもがコーンや線の内側を走った場合には、相手チームの子どもから指摘が挙がることがあった。また、保育者は注意を促す声かけをしていた。ただし、コーンや線を大幅に超えたわけではない場合には、保育者が注意を行わないことがあった。保育者が注意しなかった背景には、勝敗に大きく影響することはないという判断が働いたこと、ゲームを中断することで遊びが停滞する可能性があったこと、子ども同士の指摘によりルールを守ることへの意識化を図りたいという思いがあったことが考えられる。

表3の②は、フライングをして走り出す子どもの事例である。6月の2事例では、保育者が子どもを引き留め、スタートのやり直しを行っていた。7月の事例では、子どもがフライングしたことを受けて、

保育者が「今のでいいの？」と子どもたちに問いかけを行っていた。保育者には、ルールへの意識化を図り、子どもたち自身の意思でやり直しを提案してほしいという思いがあったと考えられる。保育者の問いかけに対しては、数人の子どもが「だめ！」と答えたことで、スタートのやり直しが行われた。その後には、他児からフライングを判定する声が挙がる様子が確認された。

表3の③は、スタートラインより前に足が出ていた子どもの事例である。6月に、スタートラインより前に足が出ている子どもが、ラインの踏み越えに気づいていない様子であったことを認めた保育者が、線からはみ出さないように促す声かけをしていた。7月には、スタートラインより前に足が出ていた子

どもに対して、保育者は「スタートの準備はできていますか？」「足はスタートラインに揃えて並べていますか？」と問いかけていた。この声かけの背景には、保育者に指摘されて気づくのではなく、子ども自身で確認することで気づいてほしいという保育者の思いがあったと考えられる。

6. 事例にみるゲーム途中の離脱と周囲の反応

表4は、ゲームの途中で離脱した子どもの事例である。①は、転がしドッジにおいて体に当たったボールが、有効か無効かで言い合いになり、保育者の介入で審判役の子どもが出した判定に従うことになったものの、その判定に納得のいかなかった子どもが遊びから抜けてしまった事例である。②は、転がし

表3. リレーに勝ちたいという思いからルールを破った子どもの事例

<p>①コースの内側を走る</p> <p>【6月 好きな遊びの時間】赤チームの子ども2名がコーンと線の少し内側を走ったことに気づいた白チームの子どもは「入った！」と保育者に訴えた。その後、今度は白チームの子どもがコーンと線の少し内側を走った。次戦では、バトンを落とすハプニングによって赤チームに追い抜かれた白チームのアンカーが、コーンと線のかなり内側を走った。その姿を見た赤チームの子どもは「入ってる！」と声を挙げた。これを受けて、保育者はコーンの外側を走ることを促す声かけをした。次戦においても、白チームの子どもが線の内側を走ったのを見て、赤チームの子どもが「今入った！」と叫んだ。</p> <p>【6月 みんなと一緒にの時間】赤チームの子どもが、コーンが置いてある線の少し内側を走った。また、次戦では、白チームの子どもが、コーンが置いてある線のかなり内側を突っ切って走っていた。しかし、これらの行為について、他児から注意や指摘の声が挙がることはなかった。保育者も子どものルール違反に気づいている様子であったが、注意は行わなかった。</p> <p>【9月 好きな遊びの時間】白チームの子どもがコーンと線の少し内側を走ったが、他児から注意や指摘は挙がらなかった。</p>
<p>②フライングをする</p> <p>【6月 好きな遊びの時間】赤チームの子どもがフライングをして走り出したのを見た保育者が「待って」と声をかけて子どもを止め、再スタートの合図をする。しかし、今度は両方のチームの子どもがフライングをしてしまったため、再び保育者が子どもを止めた。この後のスタートの合図では、子どもがフライングをすることなく走り出すことができた。</p> <p>【6月 みんなと一緒にの時間】両方のチームにフライングがあったため、保育者が声をかけて2人を止め、スタートのやり直しを行った。次戦においても、両チームにフライングがあったため、スタートのやり直しがあった。さらに次戦でも、子ども1人にフライングがあり、スタートのやり直しがあった。</p> <p>【7月 好きな遊びの時間】両チームにフライングがあったことを受けて、保育者が「今のでいいの？」と子どもたちに問いかけると、数人が「だめ！」と答えた。保育者は走り出した子どもを止め、スタートのやり直しをした。次戦においても、子ども1人にフライングがあったが、この時には他児から「ちょっと待って、今のなし！」という声が挙がったため、スタートのやり直しが行われた。</p>
<p>③スタートラインをはみ出す</p> <p>【6月 好きな遊びの時間】一人の子どもの足がスタートラインより前に出ている。保育者が線からはみ出さないよう促す声かけをすると、その子どもはすぐにスタートラインに足を揃えた。</p> <p>【7月 好きな遊びの時間】両チームの子どもが、スタートラインより前に出ている。保育者は、子どもたちにスタートの準備ができていないかを確認するように声をかけ、スタートラインの線に足を揃えて並ぶよう促した。2人の子どもは保育者の声かけを受け、スタートラインに足を揃えて並んだ。</p>

ドッジにおいて外周から枠内の子どもにボールを当てる役をしたいのに毎回ジャンケンに負けていた子どもが、自分のなりたい役を何度も務めていた子どもがいることに不満をもらし、ゲームに参加しようとしなかった事例である。この子どもは、保育者の提案によって、自分のなりたい役につくことができ

たことで、ゲームに再び参加している。③も転がしドッジの一場面であり、帽子をかぶり直していたためにゲーム参加を一時中断しているつもりであった子どもが、ボールを当てられてしまい、無効であると主張したものの枠内にいたため、保育者から参加を中断する時には枠外に出る必要があるという指摘

表 4. 子どもの間のトラブルや葛藤に伴って遊びからの離脱が生じた事例

①転がしドッジ (6月)

ゲームの終盤で、K児が転がしたボールがバウンドしてL児に当たったことで、2人の間で「当たった!」「跳ねていたから当たってない!」という言い合いが始まった。審判の終了の合図があったのを機に、L児は転がしドッジの場を離れようとしたが、保育者は「ちょっと困ったことがあったみたいだね」と声をかけ、子どもたちを集めてK児とL児から話を聞く。K児は「転がしたボールがLくんに当たった」と言い、L児は「跳ねていたから当たっていない」と言う。保育者が「こんなときは誰が決めたらいいかな?」と問いかけると、子どもたちは「審判!」と答えた。審判役の子どもは「今はちょっと跳ねていたからなし」という判定を出した。これを受けて保育者が「困ったことがあった時は審判に聞くように」と伝えたものの、L児は判定の結果に納得がいかない表情をしており、話し合いが終わった後にその場を離れた。保育者は子どもを引き留めたり、参加を促がしたりすることはなく、子ども自身の中で気持ちの調整をするのを見守っている様子であった。

②転がしドッジ (6月)

3回戦目の最初の鬼役を務めたかったが、ジャンケンで負けて鬼になれなかったM児は「ちょっと休憩」と言い、3回戦目には参加しなかった。4回戦目にゲームに戻ったM児は再び鬼役をしたいと申し出るが、他にも希望者があったためにジャンケンをすることとなった。M児はその中に最初にジャンケンに勝って鬼役をすでに務めていたN児の姿を認め、「Nくんさっきも鬼してたじゃん」と文句を言った。結局ジャンケンに負けたM児は4回戦にも参加しなかった。その様子に気付いた保育者が「Mちゃんも中に入って一緒にやろうよ」と促すと、M児は4回戦に参加した。5回戦目にも鬼役に名乗りを上げたN児に対してM児は「Nくん3回目!」と抗議した。これを受けて、保育者から「まだ鬼をしたことがない人が鬼をする」という提案がなされ、M児が鬼役を務めることになった。この回では、楽しそうに参加するM児の姿があった。

③転がしドッジ (6月)

鬼役は白帽子、逃げる役は赤帽子と決められていたが、O児は枠内で逃げる役でありながら鬼役の白帽子をかぶっていた。他児から「白帽子だよ」と指摘を受けたO児は帽子を脱いで手に持ったまま、しばらくの間ゲームの様子を眺めていた。そのうちに鬼からボールを当てられたO児は鬼に対して「まだやってないよ!」と何度も叫んだ。その様子を見ていた保育者が「Oちゃんそれはなしだよ。帽子を被り直す時や困った時は枠の外に出てね」とO児に声をかけると、O児はゲームへの参加をやめてその場を離れた。

④リレー (9月)

赤チーム4人、白チーム4人でリレーを始める。1回戦から3回戦まで赤チームが勝ち続けたため、白チームのP児が「赤チームになりたい」と言うが、赤チームは全員がチームを変えたくないと言う。赤チームのQ児がリレーの人数を増やすことを提案し、数人で他児を呼びに行くが、誰も集まらなかったため、3回戦と同じメンバーで4回戦をすることになった。赤チームになりたがっていた白チームのP児とR児はゼッケンを脱いで、リレーの場から離れてしまった。白チームが2人抜けたため、そばにいた保育実習生が、赤チームの子どもに白チームに移動してくれる子どもがいらないか尋ねるが、赤チームは全員赤チームのままがいいと言う。結果として白チームの2人は2回ずつ走るようになった。直後に、赤チームのS児がゼッケンを脱いでリレーをやめてしまったため、赤チームのうちの一人が2回走るようになった。この状態で次の回が始まるが、白チームの一人が、自分が走る回がまわってきたことに気づかずスタートが遅れ、リレーに負けてしまう。これにより、白チームの一人がリレーをやめたがったが、他児が呼び止め、もう一度同じメンバーでリレーをすることになった。しかし、次の回で白チームはバトンの受け渡しがうまくいかず、赤チームに半周差をつけられ、負けてしまった。白チームの2人はゼッケンを脱いでリレーの場を離れ、その様子を見た赤チームの子ども1人もリレーをやめ、遊びは終了してしまっ

を受け、遊びから離脱してしまった事例である。④はリレーの1場面である。この事例では、リレーのチーム編成に不満をもらす子どもがいたにもかかわらず、メンバーの入れ替え等について十分な話し合いが行われないままであったり、一方のチームのみが妥協しなくてはならないという状況下で妥協したチームが負け続けたりしたために、そのことに不満をもった子どもが徐々に遊びから抜け、リレーが続けられない状態に至っている。

これらの事例に共通していたのは、ルールをめぐって自分の思い通りにならなかった時、判定や協議に納得がいかなかった時に遊びからの離脱が生じているということである。ゲームにおいては、自分が参加を一時中断していることを周囲に明示する、主張が食い違った時の判定は審判にゆだねるという対応が必要になることがある。また、お互いに遊びが楽しく進められるように、思いを十分に出し合い、双方が納得する答えを導き出すことが必要である。しかし、幼児期の子どもには、公平性を保つために他者視点に立つことや、自分の主張と違っていても判定に従う必要のあることを、自分の力で理解していくことはむずかしい。また、子どもたちだけでは双方が納得する答えまでたどり着けないケースが出てくる。この時期の子どもは、判定に反発したり、拗ねて遊びから抜けたりしつつも、公平なゲームを楽しむために従わなくてはならないこと、ゲームに参加するにあたって自身の中断などを周囲に伝えなくてはならないことがあることに、保育者等の支援を受けながら気づき始める段階にあると考えられる。

IV まとめ

子どものルールを破る行動をみると「ボールに当たりたくない」「ボールを当てたい」「リレーに勝ちたい」といった強い思いがあって起こるものと、遊びに入りこめていなかったり参加の意欲が低下したことによって「ゲームから一時的に離脱あるいは中断する」という形で起こるものがあった。また、枠から出ないようにボールを避けて逃げる面白さや、ルールを守りながら競う楽しさがわかるようになるなど、ゲームの経験を積むほどに守れるようになるルールもあれば、逆に試行錯誤が増えることで破る回数が増えるルールもあることがうかがえた。

ゲームに熱中し、その中で試行錯誤する姿は、ま

さに子どもが自己を十分に発揮し、主体的に遊ぶ姿である。そのなかでルールを破ってしまった時に、保育者や他児から指摘を受けることで、子どもは自分の行為がルールの範囲外にあると受け止められたことを知るという経験を積んでいくと考えられる。そして時には、他者からの指摘と自分の思いとのずれに不満をもったり、素直に聞き入れることができずに葛藤したりする。これによって気分が落ち込み、遊びから離脱してしまうことも起こる。保育者はルールについての判定や注意を伝えるだけでなく、遊びの進行状況によっては指摘をせずに見守ったり、子どもの気づきを促がしたりするといった柔軟な対応をとる必要があると考えられる。また、ルールを守ることに際して葛藤や不平・不満をもった子どもの思いを保育者が受け止めたり、他児と共有したりすることも必要と考えられる。加えて、リレーの事例にあったように、ルールを守っていたとしても、チームの走力差があるために一方のチームが負け続けるといったことが起こった場合に、遊びの停滞や離脱を生んでしまうケースが出てくる。そのため、ルールを守ることにとどまらず、公平な遊びについて考える機会をもつことも必要であろう。

文献

- 広兼睦 (2016) ルールのある遊びを通して 5 歳児の人とかかわる力を育む, 広島大学附属三原学校園研究紀要, 6, 51-56.
- 松永愛子・大岩みちの・岸本美紀・山田悠莉 (2013) 3 歳児の子ども集団の「規範意識の芽生え」における保育者の役割—非言語的応答関係による「居場所」生成—, 保育学研究, 51(2), 75-86.
- 村野智康 (2015) 「自分達でルールを工夫し継続する集団遊び」の割合—4・5 歳児の自由遊びの観察から—, 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園研究紀要, 61, 83-100.
- 小原敏郎・入江礼子・白石敏行・友定啓子 (2008) 子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか—保育者の経験年数・トラブルが生じる状況による分析を中心に—, 乳幼児教育学研究, 17, 93-103.
- 高木香織 (2000) 保育所における子どものトラブルの発達的变化—トラブルの内容や解決方法の発達と保育者の働きかけについて—, 教育福祉研究, 26, 33-43.

田中浩司 (2010) 年長クラスにおける鬼ごっこの指導プロセス—MGTA を用いた保育者へのインタビューデータの分析—, 教育心理学研究, 58, 212-223.

上杉賢士 (2011) “ルールのある教育” を問い直す—子どもの規範意識をどう育てるか—, 金子書房.

湯浅阿貴子 (2015) 幼児のゲーム遊びに生ずる「ずる」の実態と仲間との相互交渉による意識の変容—縦断的観察からのエピソード分析から—, 保育学研究, 53(3), 248-260.

湯浅阿貴子 (2016) 幼児の規範意識の形成に関する研究の動向, 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 25, 65-83.

(2020年5月20日受付)

(2020年7月15日受理)